パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

139 KINOTAYO 現代日本映画祭（2022 年 12 月 1 日）

12 月６日から、第 16 回 KINOTAYO 現代日本映画祭が始まります。今年も 150 本以上の候補作品の中から、選りすぐりの作品が上映されます。これらの作品の中には、KINOTAYO 映画祭がフランス語字幕を作成したフランスで初公開のものもあります。パリではパリ日本文化会館で、年明けからはフランス各地で上映されます。

KINOTAYO 現代日本映画祭は、フランスにおいて現代日本映画を紹介することを目的として、2006 年に設立されました。KINOTAYO とは、「金の太陽」(Kin no Taiyo)を略して作られた言葉です。なぜ KINOTAYO という名前になったのでしょうか？この映画祭を立ち上げたミシェル・モトロ名誉会長に、映画祭の命名にまつわるエピソードを伺いました。

この映画祭は、映画祭の成功に期待したヴァル=ド=ワーズ県や日本企業のスポンサーから財政支援を受け、また県内にあった大学内の一室に映画祭協会の事務所を設置して、立ち上げ準備がスタートしました。モトロさんは、映画祭の名前は、ヴァル=ド=ワーズ県と日本との関係にゆかりのある名前にしたいと考えました。県内にはゴッホが最後に暮らしたアパートと墓があるオーヴェル=シュル=オワーズがあり、多くの日本人観光客がそこを訪れます。ゴッホの作品には、太陽を描いたものが数多くあります。モトロさんによると、ゴッホの作品は「金の太陽」と呼ばれており、中でもゴッホが好んで繰り返し描いたひまわりを「金の太陽」と呼ぶことがあると知ったと言います。カンヌ国際映画祭の最高賞がパルム・ドール（Palme d’or）（黄金の椰子）、ベルリン国際映画祭の最優秀作品賞は金熊賞というように、映画祭の最高賞には金（or）が付くものがあります。これらに倣って、モトロさんは、映画祭の最高賞をソレイユ・ドール（Soleil d’or）（金の太陽）と

することを考えました。そして、ソレイユ・ドールの日本語である金の太陽（Kino Taiyo）から、KINOTAYO という映画祭の名前が誕生しました。ドイツ語で映画館や映画のことを kino ということも、KINOTAYO という名前の決め手になったと言います。

大画面のスクリーンで映画を観ることは、とても楽しい時間です。フィクション、ドキュメンタリー、アニメといったジャンルの違いはあっても、印象に残る映画というのは、観る人に何かしらのメッセージを語り掛けます。私たちは、スクリーンを通して、日常生活では体験できない世界を知ることができます。映画が、普段身近に起こっている出来事に、気付かせてくれることもあります。また、映画は、それが作られた時代の社会と切っても切れない関係にあり、フランスで現代日本映画を観ることは、今の日本社会を知ることになります。同じ社会問題であっても、フランスとの表現方法の違いを知ることで、日本の文化を知ることにもなります。

KINOTAYO 映画祭ファンの方も、まだ観たことがない方も、今年はぜひ会場へ足を運んで、映画を楽しみながら新たな日本を発見してみてはいかがでしょうか。

公式ウェブサイト　https://kinotayo.fr/jp